

研究ノート

日本サッカーの世界との出会い ～スターリング・アルビオン初来日とサッカー報道を中心に～

黒 田 勇

Japan's Football Meets World's Football ～Focused on Stirling Albion's first visit to Japan and the media coverage in 1966～

Isamu KURODA

Abstract

This essay is to describe on the first contact to the world's professional football of Japan's football regarding "professional -amateur problem" which was very controversial among sport society in Japan. In 1966, the Stirling Albion, the Scottish "semi-"professional football club, as the first British professional club to visit Japan, traveled to Japan to play two matches against Japan's team, while Japanese media and public welcomed them enthusiastically. It was just one month before their arrival that the matches were allowed to play because Japan Amateur Sports Association had strictly maintained to apply the rule of amateurism to its sports societies.

The essay follows how the Japan's media made reportages on their visit and what implication the Albion gave to their own visit.

Keywords: professional football, Stirling Albion, amateurism

抄 録

東京五輪開催後の1966年は、メディアスポーツビジネスの拡大やスポーツ観戦文化の普及などが重なり合い、アマチュア至上主義への疑いが生まれた年である。そうした転換期に初の「プロ」サッカーチームとしてスターリング・アルビオンが来日した。

本稿においては、スターリング・アルビオンの来日の前提となる日本のサッカー文化発展の経過を簡単に振り返り、1966年の「英国プロ・チーム初の来日」報道と、それに関わる議論を、新聞報道を中心に明らかにする。それに加えて、スターリング・アルビオン側からの「極東遠征」意味付け資料を提示したい。

キーワード：プロ・サッカー、スターリング・アルビオン、アマチュアリズム

はじめに

「スターリング・アルビオン (Stirling Albion Football Club)」(以下、スターリング・A) というサッカークラブを知る日本人は多くない。英国・スコットランドの中央部に位

置する大学都市、スターリングにあるクラブチームであり、2017-18のシーズンにおいてスコットランドフットボールリーグ (Scottish Football League: SFL) の2部に所属する。そのうえにプレミア・リーグなどが存在するので実質4部に所属する、いわゆる「ローカルクラブ」である。

このクラブは、初の「プロ」チームとして、1966年の6月に来日し、日本代表、日本選抜と二試合を行っている。このクラブの来日とその報道は、日本サッカーにとっても、日本のメディアスポーツ、とりわけサッカー報道という点からも、一つの「黎明期」と位置づけることができる。さらに、来日にかかわってもう一つの重要な議題として「プロ・アマ」問題があった。日本のスポーツ界は明治以降、厳格なアマチュアリズムを信奉してきた。そのアマチュア精神がプロとの交流で汚されるという議論が、スターリング・Aの来日を契機になされた。その意味では、日本のスポーツの転換期であったとも位置付けられる。

本研究全体としての問題意識は以下の通りである。1964年の東京五輪とともに日本のスポーツが世界に出会ったことにより、大きく動き出した。そのことにより、これまでのアマチュア至上主義による学校・企業スポーツと、プロ野球や相撲、格闘技の興行スポーツという単純な二分法が時代と社会にずれを起し始めた。そこにはテレビの発達によるメディアスポーツビジネスの拡大やスポーツ観戦文化の普及などが重なり合う。まさにそうした転換期にスターリング・Aが来日したのであり、また来日とその転換期をより明確にするものとなったのではないか。

ただ、研究ノートとしての本稿においては、スターリング・Aの来日の前提となる日本のサッカー文化発展の経過を簡単に振り返り、1966年の「英国プロ・チーム初の来日」報道と、それに関わる議論を、新聞報道を中心に明らかにし、加えて、スターリング・Aの側からの来日の意味付け資料を提示するに留めたい。

1. 日本サッカーの歴史

a. 黎明期

ここでは日本サッカーの歴史を簡単に触れる。すでに、日本体育協会、日本サッカー協会をはじめ、多くの歴史書が出されており、また、近年では後藤健生が詳細な歴史を記述

しているが¹⁾、とりわけスコットランドとのかかわりにおいて、それらの文献を参考にしつつ簡単にまとめておきたい。

そもそもサッカーが「フットボール」と呼ばれ、19世紀半ばには英国のパブリックスクールを中心として様々なルールの下で行われていたが、1863年の協会（Football Association: FA）の設立により、ルールが統一され、また現在に至るサッカーが労働者階級にも、また世界的にも普及していったことよく知られている²⁾。

英国から日本に持ち込まれたのは幕末であり、まだこの「協会のフットボール」、いわゆるサッカーの確立以前であったが、英国人の設立した横浜のスポーツクラブで英国人によってプレーされていたという。しかし、そこで日本人も一緒にプレーしたという記録はない³⁾。

日本人がサッカーをプレーしたという記録は、1873年から1874年にかけて、海軍兵学寮と工部省の工学寮において、英国人の指導の下に「フットボール」がなされたという記録があり、一般的には、これをもって日本のサッカーの創始とする文献が多い。ただし、これ以降日本の高等教育によってフットボールがなされたとはいえ、それらが現在のサッカーであったかどうかは明確ではない⁴⁾。協会のサッカーにしても、現在のようなルールではなく、例えば、現在のラグビーフットボールとの違いは今よりもはるかに少なかった。したがって、19世紀の日本のサッカーは、当時の英国で行われていた様々なフットボールが、英国の動向に時間的なギャップを持ちながら行われていたと理解していいだろう。

20世紀に入り、日本でもFAのサッカーが日本人によって紹介され、師範学校で教えられるようになって、初めてサッカーが本格的に競技されるようになる。この経過についても様々な文献が記述しているが、なかでも象徴的な人物が、坪井玄道と英国人デハビランド⁵⁾である。坪井は欧州の留学から帰国後、「アソシエーション・フットボール」という指導書を著し、東京高師の蹴球部部长として指導に当たる。デハビランドは、1906年に第四高等学校から東京高師に赴任し、サッカーの指導に当たり、その生徒たちが、各地の師範学校でサッカーを広めることとなった。埼玉、静岡、神戸、広島など、師範学校でサッカーが教えられ、それぞれの地域が日本のサッカーの発祥地として数えられている。その意味では、20世紀初頭の10年が日本サッカーの黎明ともいうことができる。

1) 後藤健生（2007）、日本蹴球協会（1974）など。

2) Walvin, J. (1994), pp.96-117.

3) 後藤（2007）、25頁。

4) 同上、25-28頁。

5) 同上、30頁。

ちなみに、近年女子サッカーの普及、発展とともに、女子サッカーの起源についても様々な議論と記述があるが、近年では1906年に丸亀高等女学校とされてきた⁶⁾。ただ、別の研究では、1906年に東京の高千穂小学校、さらには1904年の東京女子体操音楽学校でなされていたという指摘もある⁷⁾。ここでも、坪井とその門下の影響は大きかった。女子に「遊戯」として教育する中でサッカーが取り入れられたのも20世紀初頭であったことは間違いないだろう。

b. 1920年代の普及期

1920年代には、日本は選抜チームを作って海外のチームと試合をすることとなる。第一次大戦後急速に海外との交流が拡大する。当時東アジアの強豪チームは中華民国、香港、フィリピンであったが、当時の日本は全く歯が立たなかった。

その戦いの中で、日本に様々なサッカー戦術を指導したのはビルマからの留学生、チョウ・デインである。チョウ・デインによるサッカー指導についても多くの記録があり、彼の日本サッカー界への貢献により、彼は近年日本サッカー協会のサッカー殿堂入りをしているが、ここで特筆すべきは、彼もまた、スコットランド人からサッカーを学び、日本サッカーも、スコットランドタイプとされるショートパスが伝統となったことである⁸⁾。日本の近代化に貢献した「お雇い外国人⁹⁾」の中には英国人が最も多かったが、なかでもスコットランド人が多かったとされ、ビルマでも同様であったのかもしれない。要は、英国においても「周縁」とされるスコットランド出身者が、本国よりも海外に目を向けていたと想像できる。ともかくも、比較的小柄なスコットランド人に適したショートパスサッカーが、スコットランド人、そしてスコットランド人の指導を受けたであろうビルマ人によって、日本サッカーの特質となったといえることができるだろう。

さらに、後藤も指摘するところだが、英国から世界に広がったサッカーは、多くの場合、その国の労働者階級の「気晴らし」として普及し、多くは社会の底辺において拡大していった。日本においては、他のスポーツと同様に、学校教育、それも高等教育を通して普及していく。これも日本サッカーの特質である。その理由として、他の多くの地域においては、英国人の楽しみが、直接一般の人々に普及し始めるのに対し、日本の場合、すでに明

6) 「朝日新聞」(香川県版) 2011年12月1日付。

7) 今井 (2013)

8) 後藤 (2007)、38-41頁。

9) 梅溪 (2007)

らかなように、来日した英国人の多くは、「お雇い外国人」として、教育の場にあり、そこでサッカーを学生・生徒に教えたということによるものと考えられよう。そして、これがサッカーやスポーツにおいてアマチュア主義を当然とする考え方を根づかせる一因ともなった。この点の詳細な考察は、稿を改めたい。

その後、中等・高等教育の中で普及したサッカーは1920年代には日本蹴球協会が設立され、新聞社主催の大会が開催されるようになる。全国中等蹴球優勝大会は、大阪毎日新聞社が主催し、ラグビーも併せて同じ大会として開催された¹⁰⁾。この時期、1915（大正4）年開始のいわゆる「甲子園野球」を筆頭として、スポーツが中等・高等教育の中で普及発展し、また、教育も次第に普及し、そのスポーツを中等以上の教育を直接享受できない「庶民」層が娯楽として捉え、さらに、新聞社が読者層の拡大を目指して、学校スポーツを組織化し、また大会を主催ないし後援することになり、益々学校スポーツが学校教育を越えて社会で「見るスポーツ」娯楽として普及することになる。

そして、1936年のベルリン五輪で、サッカーは最初の成果を見ることになる。当時の欧州の強豪国であるスウェーデンを破るという番狂わせは、当時の新聞でも報道されているが、「蹴球も勝つ スウェーデンと対戦」（1936年8月5日朝日新聞）と小さく速報され、翌日の試合経過の記事についても、大きな記事ではない。

2. 英国サッカーとスターリング・アルピオン

a. スコットランドサッカーの歴史と特質

まず、スコットランドのサッカーについて簡単に記しておきたい。歴史的にサッカーの起源については様々に語られているので、ここでは省略する。少なくとも、近代スポーツという観点からは、英国のパブリックスクールや大学でなされていたスポーツの一つとしてのフットボールが、現代のサッカーの起源であることは間違いない。そして、冒頭で述べたように、1863年にフットボール・アソシエーション（Football Association; FA）が成立した。この時期にサッカーの組織、運営、競技自体を主導していたのはパブリックスクールを出たミドルクラスの人々であったように、この時代は、スポーツはミドルクラス以上の独占物といわれている¹¹⁾。しかし、19世紀半ば、労働者階級の余暇は次第に増大する。

10) 「毎日新聞百年史」

11) Walvin (1994) pp.32-51.

とりわけ、1866年の日曜法、土曜日の午後は休みという法律の制定によって、多くの労働者が休日を余暇として過ごせることとなった。

つまり、支配階級としてのミドルクラスたちの独占物であったフットボールが学校の枠を超え協会の組織化でルールが統一されたことは、フットボール自体が支配階級の独占の象徴たるパブリックスクールを超えることとなったのである。さらに言えば、この後、1870年の教育法（Education Act of 1870）が制定され、原則として5歳から13歳までの子どもたちが小学校に通い、そこで、教育としてスポーツをする機会を得ることとなる。

こうして、支配階級の独占物とされたスポーツ、少なくともフットボールは、そのルールの簡便さ、ボール以外の道具をほとんど必要としないということ、さらに中世以来の民衆文化でもあったフットボールの習慣もあり、19世紀末には、労働者階級の間でも、瞬く間に普及することになったのである。とくに、スコットランドは、イングランド以上にフットボールの労働者階級への普及は早かったとされる¹²⁾。

SFA (Scottish Football Association) は1872年に組織され、FAと同様にパブリックスクールの卒業生が中心となっていた。しかし、19世紀後半、英国全体の工業地帯となったスコットランド中部では、労働者階級の中で、他のスポーツ機会を圧倒して、急速にフットボールが普及する。そして、その後のスコットランドフットボール発展の中心になったのが、1874年にグラスゴーで設立されたRangersであり、また、それに対抗する形で同じく1888年にグラスゴーに設立されたアイルランドからの移民の拠り所となるCelticであり、ともに、その後“Old Firm”と呼ばれ、ビジネスとしても、文化的にもスコットランドを代表するクラブとしてスコットランドのサッカーをけん引していく。そしてこれらのクラブチームに限らず、他のクラブにおいても、イングランドとは異なり、パブリックスクールや大学のOBによって作られたものではなく、早い時期からプロフェッショナルの選手が活躍していた。そして、スコットランドは19世紀の末から1990年代に至るまで、南のイングランドのサッカーにとって、優秀な選手の供給源にもなってきた。

さて、イングランドのサッカーとスコットランドのサッカー（これ以降、FAのフットボールを指す場合は「サッカー」を用いる）を歴史的に大きく分けるものはない。ただ、19世紀末に、サッカーが普及する中で、Walvinの著作に興味深い記述がある。

イングランドのサッカーは、FA成立後もパブリックスクールや大学のOBたちの影響が強いまま維持され、得点や勝利よりも、個人の技の披露等に価値が置かれていた。つまり、

12) Walvin (1994), p.49, Bairner, A. (2000), pp.87-104.

個人の身体能力や技術を評価する伝統が維持され、ドリブルが発達するのに対し、各地域のコミュニティに急速にサッカーが普及したスコットランドでは、観戦する観客は得点や勝利をまず期待し、その影響からパスによる得点のための戦術が発達したというのである¹³⁾。

前章で述べた日本のサッカーとのかかわりで言えば、ミドルクラス主導だった当時のサッカーであったからこそ、英国人教師が日本にサッカーを教育の一環として持ち込み、そして、職業的機会を求めて国境を越えてイングランドに移動したサッカー選手と同様に、教師、指導者としての職業機会を求めて日本に来たのもスコットランド人であった¹⁴⁾。

b. スコットランドアイデンティティとサッカー

スコットランド人の意識の中でなぜサッカーが愛されるのかに触れておく必要がある。先に、英国において19世紀後半にはほぼ同時に進行した、労働者の余暇の増大、義務教育による体育授業の展開、そしてフットボールの組織化とルールの統一などが、サッカーの普及の要因になったと述べた。さらに、スコットランドでは、ミドルクラス以上の階級が愛好するテニスやクリケットに適する地理的、気候的条件が悪く、階級を越えてフットボール普及の素地があり、さらに、労働者階級を排除するほどの強力なブルジョワ支配がなかったとも言える¹⁵⁾。

さらに、19世紀半ばのスコットランドには、多くのアイルランドからの難民・移民が殺到した。1850年のアイルランドの大飢饉（The Great Famine）により、当時英国の植民地だったアイルランドからアメリカをはじめ世界に移民が増大した。その中でも、当時ロンドンに次いで第二の工業都市であるグラスゴーを中心として、スコットランドの中部には、アイルランド移民が集中した。先のハイバニアンも、ダンディー・ハイバニアン（現 Dundee United）も、そしてセルティックも、1870年代から80年代にかけて、アイルランドからの移民たちが苦しい生活の中から組織したチームである。そこでは、単なる余暇のスポーツを越えて、サッカーは、移民共同体の連帯を表現し、アイルランドのアイデンティティを確認する重要な行為となっていく¹⁶⁾。

もちろん、この現象とは表裏一体のものとして、一方で、反アイルランド、反カトリック

13) Walvin (1994), pp. 74-75.

14) 梅溪昇 (2007)

15) Bairner (2000), p. 89.

16) Bradley (2004), pp. 19-88.

クの感情が長くスコットランドを支配してきた。そして、当然のことながらそれはスコットランドのサッカー文化、とりわけオールドファームに象徴されてきた¹⁷⁾。

さらに、隣国イングランドの存在もまたスコットランドのサッカーに影響を与えている。

アイルランド移民が、スコットランドの中でそのアイデンティティを確認する絶好のチームスポーツであるのと相似して、スコットランドにおいてサッカーは対イングランドにおいてスコットランドアイデンティティを表現する絶好の機会としてとらえてきた。そして、実際に対等の勝負をするスコットランド代表の活躍によって、ますますサッカーへのスコットランド人の情熱は高まっていった。このように、「私たち」と「彼ら」では、中世のフットボールのような、共同体を二分する祭礼のような競技として、スコットランドでは普及しやすかったと考えられる。

さらに、代表チームとともに、外国に出るサポーターたちも、70年代以降、イングランドのサポーターたちがフーリガンとしてその暴力性が注目されたのに対し、スコットランドのサポーターたちは、タータンアーミー (Tartan Army) と呼ばれ、各地で友好的でユーモアにあふれ、応援を楽しむタイプのファンと分類される¹⁸⁾。そして、彼ら自身が、イングランドとは違う「われわれ」を自覚したパフォーマンスを行っている。

3. 戦後日本サッカーの国際化、スターリング・アルビオンとの出会いまで

a. 50年代の国際試合

第二次大戦後、東京五輪までにメルボルン五輪を含め、海外遠征と日本への海外チームの招聘を、20回にわたって行っているが、対戦したチームはすべてアマチュアチームであった。

この中で戦後初めて来日したスウェーデンのヘルシンボリに関する記事を取り上げたい。ベルリン五輪での対戦国、そして大戦中の中立国ということで、協会と朝日新聞が招聘したチームであるが、各地を回っての試合は日本のチームは一点も取れず全敗している。この時期、新聞紙面は紙不足の関係もあり、独立した「運動」欄が登場する以前だったが、試合ごとに、相手の監督の談話を掲載し、日本チームの評価を得ている。下記の記事は

17) 小笠原博毅 (2017) 小笠原は、セルティック・サポーターたちの視点から、この状況を考察し、この両クラブのサポーターたちの対立、そしてスコットランドサッカーとその社会の対立をアイルランド対スコットランド、カトリック対プロテスタントという単純なフレームで解釈することを否定しているが、本論では、「単純な解釈フレーム」による概説に留める。

18) Gulianotti, pp.59-61.

全日程終了後の副団長の談話であるが、対戦チームが日本チームの評価者であり、指導的な立場にあると考えられていたことが読み取れる。

全日本軍が実力一位 欧州の試合技術に学べ 日本サッカーの印象

スウェーデン・サッカー リーバーグ副団長記

一九三六年ベルリン・オリンピック大会で日本がスウェーデンを3-2で破って以来、われわれスウェーデン・サッカー人はもう一ぺん日本のサッカーと対戦するチャンスを願っていた。…（中略）…

もちろんわれわれは全試合に勝って喜んでいる。また日本のサッカーが多くの長所をもっているのに贅辞を惜しまない。その一つは日本の選手が非常に優秀でがんこに闘うことである。ただこの闘志がガムシヤラなタックルとなって現れているのは感心しない。この表現は余り強過ぎるかも知れないが、もちろん私としては彼らの強過ぎるタックルにはなにも悪意があるとは思わない。しかし本当をいえばああいうタックルの八割はヨーロッパならばファウルでフリー・キックをとられるということを指摘しておきたい。正しいタックルは日本選手がもっと国際試合の経験を積みば得られる。

（朝日新聞東京本社朝刊1951年12月5日付）

以上の記事は、対等な対戦相手というスタンスではなく、ヨーロッパのサッカーに学ぶ、「教師」から評価を得るというスタンスに終始している。

そして、この報道姿勢は、この後も大きく変わることはない。ただ、現在では日本サッカーの特徴、あるいは日本人の気質として語られる、クリーンさ、フェアさは、決して伝統的なものでないことは、「教師」からのコメントでも明らかである。乱暴なディフェンスは技術、能力の稚拙さによるものであり、日本もその後学んで進化したと理解すべきものである。

それから三年後1954年のスイスW杯予選には、日本だけがエントリーし、ほぼ出場は確実かと思われた。しかしその後韓国も名乗りを上げ、結局日本は韓国に敗れW杯への初出場はならなかった。1954年3月に東京で開催された二試合については、同時期に開催されていた大相撲春場所やプロ野球のオープン戦とほぼ同じスペースの報道で、とりわけ大きな扱いをされていたわけではない。W杯自体も、ヨーロッパと南米の戦いが中心であり、まだアジア北米、アフリカはほとんど枠外の地域といってよかった。ちなみに当時は、「世界サッカー選手権」と記されていた。

結局、韓国とは初戦1対5と大敗し、二戦目は引き分けたが、報道の中には、韓国チームから学ぶべき何かについての記述はほとんどない。担当の中条一夫記者は、韓国について、事前の練習で「ばねの強さは聞きしに勝る」（朝日新聞3月3日付）とし、また第一戦の大敗を「韓国得意のプレーを日本が老巧さ遅攻で自己のペースに引き入れることができなかつたのはグランドのせいでやはり最大の敗因だろう」（3月8日付）と評価している。ただ、第二戦展望では、「昔からよく言われていた力（韓国）と技（日本）の差という言葉が伸縮性のある力強いわざと小器用な技の差という言葉に変えなければならないような気がした」（3月13日付）という評価は、韓国の強さに対する肯定的評価と読むことができよう。

1956年のメルボルン大会は、報道は水泳に集中し、サッカーに関しては3敗という成績もあり、大きな記事とはならなかつた。

b. クラマー招聘と東京オリンピック

1964年の東京五輪招致決定が1958年であり、地元開催に向けての強化が始まるが、1960年のローマ五輪には出場できず、サッカーに関する報道はない。

東京五輪に向けての日本代表の強化は、他の種目と同様に集中的に行われ、1960年ドイツ人コーチ、テッドマール・クラマーが招聘されている。東京五輪で、ある程度の成績を収めた結果、クラマーの指導者としての能力は、その後多くのメディアで取り上げられ、ドイツ人の勤勉さ論理性と日本人の勤勉さが結び付けられ、指導者の代表としてクラマーが位置づけられていく¹⁹⁾。

英国、それもスコットランドサッカーを範とし、スコットランド人の指導者によって始まったといってもいい日本サッカーの普及はここで、ドイツのサッカーを範とすることとなる。クラマー及び、この時期の日本サッカーに関しては、明石をはじめ、多くの記述があるので本稿では省略する。

日本のサッカーにとって東京五輪が大きな転機になったことは他の競技種目と同様であるが、金メダルを取ったバレーボールや柔道以上に、その後大きな発展を遂げていく。

まず、東京五輪においては、「強豪」アルゼンチンを2-3で破ったことは日本サッカー史上でも画期として記録されている。その後、ガーナ、ユーゴスラビアに敗れてはいるが、オリンピックでの勝利は大きなものだった。

19) 明石 (2006)

ベルリンの奇跡の再現

「大和魂の勝利」とクラマー氏

『世界最低』といわれていた日本のサッカーが、強豪アルゼンチンに逆転勝ちした。二十八年前、ベルリン大会に見た『奇跡』の再現である。技術はここ数年確かに向上した。しかし、この勝利を下イッ入コーチ、クラマーさんは「大和魂の勝利だ」といった。この日の相手のアルゼンチンは日本のプロ野球以上にプロサッカーが盛んで、五月、ペルーのリマで行われたオリンピックの南米地区代表決定戦ではベル

と対戦、観衆が熱狂して三人の死者を出したほどの凶た。試合終了の笛が響くと、日本手は抱き合い、手を振って喜び、わきかきをするスタンドでは、ペーリン・オリヒックのゴールキパー佐野理平さん五郎らが、あ時、優勝候補スウェーデンに逆勝つて、「東洋君主国の奇跡」と報道されたときの感激を再びにこみかきえらせて目を潤ませ

クラマーの功績は、日本チームの強化だけではない。東京大会後、クラマーは離任するが、離任に当たって日本サッカーにいくつかの提言を行っている。その一つが「日本リーグ」の設立であった。定期的な試合がチームを強化し、日本サッカー全体の底上げとすそ野の拡大につながるという考えは、次のメキシコ五輪につながるるとともに、それまで、野球と相撲がメジャーな観戦スポーツであった日本において、マイナー・スポーツであったサッカーにメディアの定期的な注目を集めることにもなった。

「朝日新聞」1964年10月15日付

さらに、日本のサッカー界は、世界のサッカーの広さと深さを、クラマーを通してみることにもなった。サッカー界は、日本におけるアマチュア至上主義と世界のサッカー界の在り方とのギャップに早くから気づき、それと葛藤してきたが、クラマーによって、それがより明確になった。

4. スターリング・アルビオンの来日報道

a. スターリングの来日経過

さて、スターリング・Aであるが、クラブによる Brief history によれば、次のような経過をたどっている²⁰。スターリング・A以前に前身として、「キングズパーク（King's Park FC）」というクラブが存在していたが、1944年にドイツ軍の空襲でスタジアムが焼失し、戦時下ということもあり、それをきっかけにクラブも自然に消滅した。

1945年5月には、再建のためのパブリックミーティングが開かれ、地元の六人の篤志家がスタジアム再建のため3,000ポンドを提供したが、スコットランド協会は、新たな名称でのスタートを示唆し、Stirling Albion という名称が投票で決定された。

同年7月31日に新チームの最初の試合が3,000人の観衆を集めて練習試合として開催さ

20) "Brief history"、スターリング・アルビオンの歴史家である P. Thomson によるメモを譲り受けた。

れた。さらに、1993年4月には現在のForthbankにスタジアムを移している。そして2010年には、サポーターがクラブの所有者となるスコットランド初のクラブとなった。

スターリング・Aは設立後、最も新しいクラブとして次第に力をつけていったが、60年代には一部リーグに昇格したり、2部に降格したりを繰り返し、「ヨーヨー」と呼ばれていた。来日後も現在に至るまで、同様にリーグを昇り・降りしているが、1991年のスコットランドプレミア・リーグ成立後は一度もプレミアに昇格していない。

さて、1965-66年のシーズンも二部から一部に昇格し、そして一部に残留を決めたシーズンであった。日本協会は、イングランド1部のシェフィールド・ウェンズデイを招聘したが、シェフィールドは同年のFAカップ決勝に進出した結果、来日をキャンセルし、その代役として、シェフィールド・Wに比べればかなり格下といえるスターリング・Aに白羽の矢が立ったとする²¹⁾。

結局スターリング・Aは、アジアツアーを受け入れ、アテネとテヘランでの試合をしたのち、6月20日に来日することとなる。アテネではAEKアテネとの試合が組まれていたが、シェフィールドの代役ということで観客も少なく、いい経験ではなかったとのちに報告されている²²⁾。

スターリング・Aは、ギリシャ、イランを経て6月20日に来日する。当時の新聞は、「英プロサッカー・チーム」の来日を報じている。以下、スターリング・Aの来日と試合をどのように報道したのか、その前提としての「プロ・アマ」問題をどのように同報道したのか、さらに、プロの「技量」をどう評価したのかを中心に振り返る。

b. 「プロ・アマ」問題

スターリング・Aが「プロチーム」として初来日であるということは、当然ながらそれ以前はプロとの交流は禁止されていたことを示す。そしてプロとアマの対戦は、スターリング・Aとの試合のわずか一か月前に認められたのである。

この時期まで、日本のスポーツ界において、プロとアマチュアを分ける議論は、野球、ボクシング、レスリング、相撲等に存在するが、基本的には、野球界における議論以外は、問題とならなかった²³⁾。スポーツ選手のプロ化、あるいはスポーツイベントの商業化が進む

21) 後藤(2007)、139頁。

22) 前掲“Brief history”による。

23) 古くは1920年代、長距離走に「人力車夫」が出場したことから、それを支持する新聞社と体協のプロとアマをめぐる論争があった。[遊津(1975)、193-194頁。]

70年代以前の「プロ・アマ問題」については、学問的な議論が発見できないので、この間の新聞に掲載された議論を整理しておく。

プロ・アマ対戦認む サッカー体協アマ委で決定

日本体協のアマチュア委員会（前田豊委員長）は24日正午から東京・代々木の岸記念体育館で開かれ、日本蹴球協会が計画している英国プロ・サッカーチームとの交流試合を認めることを決めた。

同協会が英国のスコットランド一部リーグのスターリング・アルビオンチームを来月下旬か7月上旬に招き東京・駒沢、国立両競技場で日本リーグ選抜チーム、全日本選抜チームと二試合をおこなって技術の向上をはかろうと計画したもの。プロとの対戦はアマチュア資格にふれるのではないかという一部体協関係者の発言があったため、その結論が注目されていた。

この会議では①国際サッカー競技連盟（FIFA）がプロとアマとの交流試合を禁じておらず、国内的には体協アマ規程付属書、4項のアマ規定4の1によって認められる②プロとの交流試合を行うことによって日本サッカー界の技術向上に役立つ——という点を重視したものである。

この問題についてさきに体協側からアマチュア委員会が取扱いを一任されていたもので、この日のアマチュア委員会の結論が自動的に日本体協の決定となる。

なおゴルフ競技はこれまでプロとアマ選手がいっしょに競技会を行っていたが、今後アマがこういった競技会に参加する場合はアマチュア委員会に競技会参加の申請手続きが必要となった。（朝日新聞東京本社朝刊1966年5月25日付）

同記事に付属する解説には、「IFの規程を優先」とのタイトルで、日本体協は、「IOC憲章の精神を尊重して」、プロとアマとの試合を禁じていたけれども、サッカーの世界の状況を考慮して、「許可制」により国内でもアマとアマの試合を認めることになったとしている。

「許可」とは、アマ規程付属書4条の1（プロ競技者と競技する場合、IFが認めている団体はその規程を提出して理事会の承認を得なければならない）の項の適用を意味している。この決定によって体協のアマチュアに関する根本的な考え方、つまり加盟団体を一つのアマチュア規程によって統一しようとしていた意図が変更され、まずIF（各国際競技連盟）のアマチュア規程が優先することを認めることとなった。この結果、当時ではサッカー

一、ゴルフ、自転車についてはIFの規約の優先つまり、プロとアマの試合が認められたのである。

さらに、同日発売の「アサヒグラフ」がスターリング・アルビオンの来日に関する特集記事を組み、その中でも、当時のスポーツ評論家として著名であった川本信正が「さらば「シャマチュアリズム」」と題して、日本の「アマチュアリズム」の問題点を批判している。

サッカーがえらい人気を集めている。だれに聞いても、おもしろいという。東京オリンピックのあとで、日本のスポーツに現れた最も大きな異変とっていいだろう。

この人気に気をよくした日本蹴球協会が、スコットランドから“スターリング・アルビオン”という本職のプロ・チームを招いて試合をすることになった。洗練されたプロの技術を学びとり、同時にサッカーのほんとうの魅力をファンにサービスしようというわけだ。

最初にこの話が、アマチュア・スポーツの本山、日本体育協会の理事会で出たとき、出席者の大半が当惑げに顔を見合わせた。陸上でも水泳でも、アマとプロの試合は国際ルールで“禁じられた遊び”である。とくにIOC（国際オリンピック委員会）がアマとプロの混同には極度に神経をとがらせている。だから体協の理事会は、サッカーが突如としてプロとの試合を発表したことが、どうも釈然としなかったのだ。

しかし、サッカーの国際連盟は「アマチュアを振興し、プロを統制する」ことを目的にアマとプロの両方を支配し、その交流も認めている。だからサッカーに関するかぎり、アマチュアはなんの気がねもなくプロとも試合ができる。

体協の理事会も結局承認しないわけにはいかなかったが、それでも入場料で黒字が出たら、ほかのスポーツの強化費にまわせとか、競技場の使用料はプロなみに払えとか、思い切りのわるい発言があったそうだ。古くさいアマチュアリズムにとりつかれているせいだろう。

サッカーの故郷、イギリスでプロの歴史は古い。1870年代にスコットランドから北部イングランドの工業地帯に流れこんできた労働者のうち、サッカーのうまい連中が工場のチームに加わって日当をかせいだのがプロのはじまりで、サッカーの生みの親、イングランドのフットボール・アソシエーション（FA）は一部の反対を押しきって、1885年にこのようなプロ選手やプロ・チームを公認し、その機構のなかでアマチュアと共存させた。

もしこの“英断”がなかったら、イギリスのサッカーに今日の隆盛はなく、またサ

サッカーが“世界のゲーム”に発展することもなかったろうとは、いまではイギリスでスポーツ関係者の一致した見方だ。

ところが一方、ロンドンを中心とする南部イングランドでは、19世紀のはじめから“スポーツは紳士のやるもの”というアマチュアリズムの思想が生まれ、これが陸上競技やボートでアマチュア規則となって固定した。後にオリンピックの金科玉條になって今日におよんでいるのも、この19世紀的“紳士アマチュアリズム”である。

明治44年の秋、創立したばかりの体協が初めてオリンピック選手の予選会を開いたが、そのとき、参加資格の規則には「紳士たり学生たるに恥じざる者」とあった。紳士アマチュアリズムが移植されていたのである。

いま体協には、全部で26項目の細かいアマチュア規則がある。昭和32年の苦心の作がそのままだが、それから10年近いあいだに、スポーツ水準の急激な向上、プロ・スポーツの隆盛、それらを伝達するマスコミの発達、レジャーの増大に伴うスポーツの大衆化など、当時予期しなかったいろんな条件が重なり合って、規則が現実をカバーしきれなくなった。

ICOの規則もまた同様で、抜け穴を教えてニセモノづくりにしか役立っていない。アマチュアリズムがニセモノ（シャム＝sham）をつくっているのだったら、いくら紳士づらをしてみたところで、それは“シャマチュアリズム”というほかはあるまい。

スポーツで生活しているのがプロ、そうでないのがアマ、と常識的に割りきったうえで、すっきりした“大衆アマチュアリズム”への方向をさぐりだす手がかりになれば、プロ・サッカーの来日は、二重の意味で大歓迎だ。（スポーツ評論家 川本信正）²⁴⁾

この評論からも理解できるように、体協の「アマチュア規定」の擁護は、すでに万全ではなく、それに対する批判勢力は、サッカーの世界の現状を利用して議論を展開していたともいえる。その意味でも、スターリング・Aの来日は、サッカーだけでなく、日本のスポーツ界の在り方を画する機会ともなったのである。

c. スターリング・Aの来日報道

まず、来日8日前に、朝日新聞が、「20日に来日 英プロサッカー・チーム」（「朝日新聞」1966年6月12日付）と報道し、「プロ」の来日を強調している。

24) 「アサヒグラフ」1966年7月1日号、91頁。



「サッカーマガジン」（1966年8月号）より転載

さらに、来日4日前の読売新聞は、「20日
来日の陣容を発表」という見出しで、次の
ように解説している。「英プロ・サッカー
“守備陣は大男がそろっているが、FWは比
較的小粒で、激しい守備と機敏な攻撃のス
コットランド・スタイルの特徴をもつチ
ームとみられる。（中略）“なお本格的なプロ・
サッカーチームの来日ははじめてだが、日
本側は航空旅費の一部と一週間分の滞在費
を負担、ギャラは支払わない。」（「読売新
聞」6月16日付）

さらに、「英サッカーチームと対戦の選手
団決る」（「朝日新聞」6月18日付）、「英の
プロサッカー来日」（同6月21日付）、「得意
はオープン攻撃 今夕、選抜軍と対戦」（「朝
日新聞」6月22日付）などの記事が続く。

初戦当日は、次のような記事が掲載されている。「巧みなボールさばき アルビオン初練
習」写真：初練習で柔軟体操をするアルビオンのメンバー「サッカーの母国」イギリスか
ら二十日夜来日したプロ・チーム「スターリング・アルビオン」は、技術はほぼ互角で、こ
ととしては、スコットランド代表がイングランド代表を破っている。」（「読売新聞」6月22日付）

そして、第一戦翌日には、サッカーと野球を合わせて、「神宮のナイターに9万人」の見
出しのもとで、「イギリスのプロ・サッカーチーム『スターリング・アルビオン』の来日第
一戦は、二十二日午後七時十分から東京・国立競技場に約四万五千の観衆をあつめ、若手
中心の「日本選抜」との間で行われた。」とのリード記事と、「アルビオンは気持ちのよい
チームだった。」「からだの寄せは、激しいが、肩から入るフェアなチャージだ」（「読売新
聞」6月23日付）などと読売が報道した。

さらに、朝日新聞も、「プロらしい厳しさ」「得意の速攻光る アルビオン 日本選抜後
半の反撃及ばず」「試合開始直前になっても観衆はつめかけ、予定開始時間を十分遅らせる
盛況」「英プロ二部下位チームぐらいの実力はある。」「アルビオンは巧妙というよりも堅実
な力強いサッカーだ」などと報道した。

また、第二戦当日には、「メキシコ用の新戦に期待 きょうのアルビオン戦」「アマチ



「朝日新聞」1966年6月27日付

ユアがプロを破る金星は、必ずしも不可能ではない」「長いリーチと出足の早さで、日本より一枚上だ」（「読売新聞」6月26日付）などと報道した。

そして第二戦の翌日には、図のような朝日の紙面のほか、読売も以下のように、スターリング・Aのプレーを賞賛した。「日本代表も敗れる アルビオン、後半に猛攻」「苦しい条件の中だけにたたきこまれた基礎技術の差がはっきり出た」「相手はグラウンド全体に心を働かせ、十一人が結びついたプレーをする」「“同競技場収容人員いっばいの約二万人のファンがつめかけ、「スキを素早く見逃さなかったアルビオンはさすがに経験を積

んでいるといえよう」「これでヨーロッパの一流チームを射程圏にとらえた」（「読売新聞」6月27日付）

この間の練習や試合報道から見るスターリング・Aの特徴は、得意の速攻、技が光る、堅実で力強い、フェアなチャージ、プロらしい厳しさ、基礎技術の差、経験を積んだ、ヨーロッパの一流チーム、などである。こうして、サッカーのあらゆる側面で、「プロ」による優れたお手本としての評価をしつつ、追いつくことができる目標としても位置付けている。そしてスターリング・Aは、6月29日に離日する。

d. スターリング・A来日の背景 「サッカーブーム」の到来

朝日新聞は、離日の翌日、この来日を含めて「“サッカーブーム”を探る」として、この時期の「サッカーブーム」の解説記事を掲載している。サッカーの魅力を「スピードとス

リル」「理解しやすいルール」とし、さらに「五輪の45万の客を受け継ぐ」と、東京五輪の際にサッカーに触れたことを契機として挙げている。

“サッカーブーム”を探る

サッカーがいま日本のスポーツ界に大旋風を巻起している。人呼んで“サッカーブーム”という。十八日のナイター早慶戦に四万人、二十二日の日英サッカー第一戦は四万五千のファンが国立競技場を埋め、二十六日駒沢での日英第二戦は約二万人取容のスタンドが試合開始一時間前には札どめの盛況である。東京オリンピックまではまだマイナー・スポーツに近かったのに、この一、二年の人気急騰ぶりは驚異的である。プロ野球関係者に「サッカーを注意しろ」と警戒させ、日本野球協会野津会長も率直に「予想外だ」というブームは、どうして生れたのだろうか。現実の声と事実から解明していくことにしよう。

五輪の刺激

観客数はオリンピックを契機に大きく変化しはじめた事実は動かせない。サッカー人の数人は「日本がアルゼンチンに勝ったことですよ」という。だがそれまでサッカーが弱かったことを割引しても、あの程度の殊勲はほかのスポーツにもあったことだ。マスコミも当時これだけを書きたてたわけではない。それをスポーツ評論家I氏はこう説明する。

「オリンピックに集った客はまず体操、水泳、バレー、柔道……といった日本の強いものを見たかったろうが、あいにくそれらの会場が狭く、切符は売切れていた。そのとき会場が大きく、数も多いサッカーの切符が余っていて、どっとそちらに流れた。その数が約四十八万で陸上につぐ二番目。しかも、そのほとんどはサッカーファンでなく、オリンピックのふんいきにひたりたかったのだ。ところが、グラウンドのサッカーをみるとスピーディーで面白い。そうだろう、世界の一流チームが集ってるのだから、どの試合を見ても一級品ばかりだった。いわば四十万以上の白紙の客に、ここで“サッカーはおもしろい”という強い印象を与えたのですよ。これが大きかった」

中心は戦後派

サッカーはいま若い層に受けている。観客の六、七割、いや、八割までが四十歳までのいわゆる戦後派である。あるサッカー担当記者は「そこを見なさい」という。四

十歳を超える戦前派は“静”を尊ぶまことに日本的な情緒が濃い時代に育った。だが、戦後派にはこの“静”とか“間（ま）”はまどろっこしい。現に踊りの世界でも若い人たちはジルバからゴーゴーへと熱狂したように、端的に“動”が好きなのだ。その記者は続けて「サッカーは“動”そのものです。ただオリンピックまでは食わず嫌いだっただが、オリンピックで食べてみたら、すごくうまかったわけです」と語ったが、正しくこれがサッカー人気の日本の特色とでもいえようか。

（「朝日新聞」東京本社朝刊1966年6月30日付）

さらに、サッカー協会技術委員岡野俊一郎は、創刊したばかりの「サッカーマガジン」誌に寄稿し、その中で「サッカーブーム」についても触れているが、岡野はその「ブーム」の一過性を心配しつつ、スターリング・Aへの観客動員を含め、その注目の高さにサッカー普及の自信を深めている。ただし、岡野は当事者として「プロ・アマ」問題への直接の言及は避けている。

昨年日本リーグの発足した当時、新聞のスポーツ欄での扱いの大きさは、われわれ関係者を非常に喜ばせた。

アマチュア競技として、初めて全国リーグに踏みきったこと、東京オリンピック終了直後、他の競技団体がひと息いれている間に、早くも次の強化策を実行に移したことなどが、報道関係者に好意的に迎えられたのがその原因であったと思う。

その昨年に比べても、ことしのジャーナリズムのサッカーに対する関心の強さは、比較にならないほど大きい。

それと同時に、試合を観に来る人の数も飛躍的に増加した。

六月十八日の早慶ナイターに四万人を動員し、サッカーの観客動員で新記録を作ったと思うと、すぐ二十二日のアルピオン対日本選抜の試合には四万五千の人が集まり、記録を更新。二十六日のアルピオン対全日本の試合では、収容能力の限界である二万余の切符は全部売切れというありさま。更に、小雨の中で行われた東西対抗の第二戦にも、二万八千という大観衆が国立競技場を埋めた。

多くの観客がスタンドを埋めることは、選手にもよい刺激となるし、また初めてサッカーを見た人の中から、将来多くの優秀な選手も生まれてくるだろう。とにかく、数年前まで“サッカー”という競技がどんなものかすら知らなかった人が「サッカー大分盛んになって来たらしい。」と知ることが普及の第一歩でもある。最近の週刊誌に

も多くとりあげられ、漫画の世界にまでサッカーが登場している。

私自身、東西対抗の試合を観ての帰り、多くの中・高校生からサインを求められるという、これまで外国でしか出会わなかった経験を日本でもした。日本のサッカー界を現在背負って立つ、若手選手などは、そのために身動きできないほどであった。しかしこれらの現象は、ある意味で“サッカー・ブーム”という言葉が持っている危険性を感じさせるものが十分ある。

“ブーム”という言葉には「一時的な流行」を意味するものがある。なるほど、今日現在は“サッカー・ブーム”である。しかし、一年後この“ブーム”はどうなっているか、それは誰にもわからない。“ブーム”という言葉そのまま、泡のごとく消えているかもしれないのである。

従って現在、最も必要なことは、この表面的なブームという現象を見て安心することなく、サッカーをもっと根強く浸透させるために、着実な努力をすることである。より多くの人々がサッカーができる環境を作り出し、より優秀な選手、チームが数多く生まれるように指導を行ない、より多くの人々が試合を見て楽しめるような努力をすることである。そうすれば“サッカー・ブーム”が終わっても、サッカーは依然として日本のスポーツ界に大きな地位を占めることが可能になる、と私は信じている。(以下略) (「サッカーマガジン」1966年8月号40頁)

当時読売新聞の運動部記者牛木素吉郎²⁵⁾は、スターリング・A 招聘を機に巻き起こった「アマ・プロ論争」に、プロ擁護の立場から論陣を張っている。まずは、戦評として、プロを「気持ちの良いチーム」「激しいが、肩から入るフェアなチャージ」と評価する。

ワザで日本選抜を圧倒

「アルビオン」は、気持ちのよいチームだった。体格のよい守備軍のからだの寄せは、激しいが、肩からはいるフェアなチャージだ。それに出足が早く、ゆるみがない。攻撃も短いパスを中盤ですばやくつなぎ、スキをみて長い縦パスをゴール前に送る。日本のすきは見のがさずに鋭くつき、スピードがあった。(牛木)

(読売新聞東京本社 1996年6月23日付朝刊)

25) 牛木素吉郎は、この後1970年メキシコW杯から2014年ブラジル大会まで、12回のW杯を取材し、2014年に日本サッカー協会の「殿堂」入りを果たしている。

さらに、牛木はスターリング・Aが帰国した翌日には総評として、当時の日本のアマチュア至上主義に対して、スターリング・Aの行為を「プロ」としての行為として称賛することで、プロスポーツの意義について啓蒙的に記事を書いている。

アルビオンの来日から アマとプロの共存

この試合を見た六万人余の観衆の中に「日本のサッカーがプロと対戦したので汚された」と思った人が、ひとりでもいただろうか。来日前、体協の中に「プロとの試合であがった収益は、スポーツ振興のためでも勝手に使うことはならん」と大声で怒号する人がいた。だが、そんな小理屈は、アルビオンのスポーツマンらしい、すばらしい試合の前にけし飛んでしまった。

アルビオンの試合態度のよさは、これまでにきたどの外国チームよりもさすががしかった。サッカーではグラウンド内で負傷して倒れた選手が出たとき、ボールが外に出るか、あるいは反則などでプレーが中断されるのを待って、選手を外へ運び出す。ところが、技術が高ければ高いほど、プレーはなかなか中断しない。そんなときアルビオンの選手は、自分たちがボールを持っていても、わざとラインの外へ出して、負傷者を早く運び出す機会を作った。ラグビーのタッチ・キックのように、自分たちのゴールからなるべく遠くへ、ラインぞいにうまくけり出していた。われわれがアマチュア・スポーツのよさだと信じていたものを、プロらしい強さ、うまさとともに持っていた。

アルビオンは技術とマナーの模範を示すことによって、日本のアマチュアに奉仕した。サッカーについては、プロだろうとアマだろうと、日本では日本サッカー協会が主催する。だから、協会がしっかりしてさえすれば障害の起こる余地はない。日本はこれからも、プロの奉仕を大いに利用し、多少でも利益があれば、遠慮なくアマチュア・サッカーの強化と普及に使えばいいだろう。

（「読売新聞」東京本社 1996年7月1日付朝刊）

さらに、「アサヒグラフ」もスターリング・A来日の総括的な記事をサッカー界における「アマ」と「プロ」に注目して掲載し、その中で岡野俊一郎も「プロ」と「アマ」の区別は意味がないという論旨で、コメントを寄せている。

6月22日、国立競技場につめかけた4万5千の観衆は、イギリスのプロ・チーム、

スターリング・アルビオンの第一戦、対日本選抜のサッカー試合を、十分たんのうしたようだ。

緑のシバフにくっきりと白いラインが浮かぶ夜間試合。コバルト・ブルーの日本チームと、白に赤の背番号をつけた英国勢の22人。夏の夜にくりひろげられる色の交錯。それ以上にサッカーそのものの妙技はすばらしかった。

勝負は3-1でアルビオンの勝。しかし全日本は善戦した。

「日本のサッカーも強くなったなあ」——プレーの区切りがつくたびに、スタンドからは満足げなつぶやきがもれた。

日本蹴球協会技術委員の岡野俊一郎氏（東大OB）は、「一口にいて全員が基本的に忠実なプレーをしています。サッカーは11人でやるゲームだがボールを持つのは一人なんですよ。そこで、ボールを持たない連中がどう動くか、ボールの出しやすいコースを作ってやる動きができるかできないかという点で差が出ましたね。むこうは11人でやっているのに、日本は2人ぐらいで、という感じがしちゃうんです。

まあ、プロだからということで事前にいろんなことをいわれましたが、プロだからなか突拍子もないアクロバットのなことをやると思ったら大間違い。われわれのまねのできないプレーをするのなら、交流の意味は全くありませんよ。サッカーというのは、プロ、アマに限らずそんなとんでもないプレーができるものではないんです。

とにかく、ボールに対する執着心というか、そういうものが滅法強い点は学ばねばなりません。技術的な点では差がないんです。ただボールに対するきびしさ、これはねえ、強いチーム強い選手とくりかえしくりかえしあたることによって、つちかわれていくんです。日本リーグをやっている、それはどうしてもゆるみが出ます。相手がノロイ動きをすれば、それに順応してしまう。このときはこう、という瞬間的なプレー、それは頭でわかっている、直接に筋肉を動かす反射的な神経は、反ぶく訓練されないと忘れてしまうんですねえ。そういう点でこういう試合は大変なプラスですよ。

選手が刺激されるだけでなくお客さんも満足されるはずですよ。うん、サッカーはおもしろいんだ——そこから普及していくんです」という。

プロとアマの試合というのでひところ日本体育協会はいきりたった。しかし、サッカーは国際連盟がそれを認めているのだし、歴史的にみて少しもおかしくない。日本のプロ、アマに対する感覚は、すべて野球のそれから出ている。しかし、ヨーロッパに育ったサッカーのプロ、アマ感覚は全く違う、アマの選手でもプロの選手といっし

よにチームを組んで、いくらでも試合をしている。プロとかアマとか、要するに選手個人が自分のプレーに報酬をうけるかどうかで判断すればいいではないか、日本人はプロというと、なにかきたないものを感じすぎる——というのが蹴球協会のいい分だ。

初の試みである「サッカー・リーグ東西対抗」も行われるし、サッカーの人気は“騎虎の勢い”である。 （「アサヒグラフ」1966年7月8日号 PP.82-83）

この頁には、“STIRLING ALBION HERE The professional soccer team from England, Stirling Albion beat the All-Japan amateur soccer team 3-1 in its Japan debut game in Tokyo June 22.” という英文が添えられ、“England” という誤りはあるものの、“professional” と “amateur” という語が対照的に並べられている。

以上のように、スターリング・Aの来日は日本の「プロ・アマ論争」に一石を投じた。さらに報道を見る限り、サッカー界としても、スターリング・Aの「プロ」としてのプレイと、来日全体の成功を称賛することで、日本スポーツのアマチュア主義に一石を投じたかったのようにも見える。

ただ、この時の「一石」は日本のスポーツ界全体に大きな波紋を呼んだわけではなく、その範囲は、サッカーにおいてはプロとアマの交流が正当化され、また世論としてもサッカー界におけるアマとプロの区別にはそれほど意味がないという認識が広がったという程度であった。もちろん、これによって、日本のサッカーが世界の「プロ」と試合をしていく流れが生まれ、翌年から立て続けにプロチームが来日するようになる。こうして、1966年は、日本のサッカー界が世界のサッカー界の「常識」に追いついた年であるということはあるだろう。ただ一方で、国際オリンピック委員会（IOC）のアマチュア規定は、この後も厳密に守られていく。

5. スターリング・Aから見た日本及び日本サッカー

a. スターリング・A 極東遠征の「まなざし」

スターリング・Aの日本訪問は彼らから見ればどのようなものだったのか。当時のスターリングの地域紙 Stirling Journal & Advertise（現在は廃刊、以下 SJA）が日本遠征決定から帰国まで、6回の記事を連載している。さらに、スターリング・A自身が、SJAの記

事や関係者の記憶をたどりながら、遠征を記録した資料を作成している²⁶⁾。彼ら自身の記憶、さらに40年近くを経ての新聞報道からは、まるで「ガリバー旅行記」あるいは「東洋見聞録」のような記憶として語られていることがわかる。

上記のようにJSAの見出しでは、「東京での二試合に一万ポンドのギャラ」との見出しで、スターリング・Aの「極東遠征」が報じられている（SJA、1966年5月29日）。記事によれば、1965-66シーズンにおいて1部リーグ残留を決めていたスターリングは、スペインのマジョルカでの強化合宿を予定していた。日本サッカー協会はFAカップファイナリストのシェフィールド・ウェンズデイにオファーが出したが、彼らはシーズンでの疲労を考慮し日本までの長旅となるワールドツアーを辞退したという。そして「同じSの頭文字を持つ」という理由でスターリングが代替チームとしてピックアップされたと記されている。

また、記事によれば、1万から1万2千ポンドの間でギャラが支払われるとされ、またこの資料によっても、日本ではフルタイムのプロとして扱われてギャラが支払われたとされるが、日本の新聞では、先述のように、交通費、滞在費以外のギャラは払わない、さらに、いわゆる「セミプロ」であることは認識されていた。ただし、実際にどうだったかは不明である²⁷⁾。

また、当初の計画では、ニュージーランド、オーストラリア、フィリピン、香港、タイでの試合も予定されたが、最終的にはアテネ、テヘランを経て日本ということになったという。

そして、6月13日にロンドン、パリを経由してアテネへと出発した。

フォースバンクニュースの特集のインタビューを受けた、当時クラブの事務局にいて、インタビュー当時、経営陣の一人であるピーター・ガードナー（Peter Gardiner）は当時の記憶を振り返っている。

**£10,000 GUARANTEE FOR TWO
GAMES IN TOKYO**
**Albion Selected for Prize Tour in
the Far East**

“Stirling Journal & Advertise” 25, May, 1966.

彼によれば、
「古い話なので多くを覚えていないが、AEKアテネと対戦したギリシャ

26) スターリング・アルビオンの試合ごとに発行される定期刊行物“Forthbank News”に、2005年に掲載された。執筆者は、クラブの歴史家であるPeter Thomsonである。さらに、多くの写真も保存されており、第5章に掲載した写真はThomsonの提供である。

27) 牛木への聴き取りによれば、当時、サッカー協会は、スイスに口座を持ち、海外チームとの試合で得たギャラの積立てや対戦相手への支払いに充てていたという（2016年11月16日聴取り）。

では良い扱いを受けなかった。現地のファンたちは、シェフィールド・Wとの試合を期待していたので、アテネの現地紙は、スコットランドリーグの下位チームとして低い評価をした。観客もわずかで、あの試合では利益はほとんど出なかつただろう」と証言している。

クラブの資料によれば、試合は、AEK アテネのライバル、パナシナイコスの the Nikos Goumas Stadium で行われ、試合は0-2で敗れている。テヘランでの試合については、3万5000人の観衆の前でプレーし、1-0で勝利し、スターリング・Aのプレイスタイルに現地は好意的だったと振り返っている。

日本での滞在については以下のように振り返る。

「そのもてなしは、これ以上ないものだった。東京で最高級の“ASAKI Prince Hotel”（訳注、赤坂プリンスホテル）に宿泊し、まるでVIPのように処遇された。第2戦の試合前には選手と役員全員が高松宮夫妻に紹介され、滞在中どこにいても特別の訪問者としてもてなされた。



スターリング・Aのような小さなクラブが国際舞台で試合ができた大変誇りに思うとしたうえで、チームのフィジカル・コーチである Hugh Allan がグラスゴー空港に降り立った時、「海外に行く機会があったとしても、これ以上の経験は2度とできないだろう」と語ったことも記録されている。

彼はまた、日本で最も人気のあるスポーツである野球との関係で訪日を記憶している。「我々が試合をした国立競技場の隣の野球場も、有名な球場で、そこでは重要な試合が行われていたが、それを上回る45000人もの観客がサッカーを観てくれたに満足している。」



また、彼らが試合をした二つの競技場を詳しく紹介しているが、とりわけ、国立競技場で試合をしたことを大変誇りに思っていることがうかがえる。

「国立競技場は数あるサッカースタジア

ムの中でも“grand old man”である。より現代的で進歩した施設の使える今日でさえ、国立競技場は、日本のサッカーシーンでは重要な役割を演じている。現在国立を永続的にホームとできるチームはないのだけれど、多くのチームが集客の最も得多いゲームを行っている」とし、「国立は、他のスタジアムにはない歴史と伝統のオーラを保持している」などと紹介している。

さらに、当時の日本に滞在していた英国人の記述も記されている²⁸⁾。

「戦後多くの優秀なアマチュアが訪日したが、スターリング・アルビオンが初のプロとして、それ以前の訪日チームとは異なる試合へのアプローチに、日本の選手たちも観衆も、強い印象を持ったと思う。彼らは、それ故に、英国サッカーのトップクラスのチームとは言えないけれども、英国サッカーの威光を保つ大きな責任を持っていたし、その責を彼らは十分に果たした。」

この英国人については、「サッカーマガジン」の記事から、Cマクドナルドであると特定できる。彼は、スターリング・Aの滞在中、通訳も兼ねて帯同している。そして、「私の見た英国チーム」というタイトルで、サッカーマガジンに寄稿している。

日本のサッカー界にとって、先ごろの英国プロ・サッカー・チーム、スターリング・アルビオンの来日は、一九六六年度の忘れ得ぬ大きな思い出の一つとなるだろう。そのことはしかし私にとっても同様である。私としては思いもかけず、故国を遠くはなれた極東の任地で、目のあたり母



28) 「滞在中チームに帯同した熱心なサッカーファンであるイングランド人だが、だれかは不明」とされているが、当時の状況から、C. マクドナルドと、牛木素吉郎氏や賀川浩氏は推測する。C. マクドナルドは、海外からのチーム招聘のマネジメント等で長く日本サッカーの発展に貢献したとして、後に日本サッカー協会の殿堂入りしている。

国のサッカーに接することができたのだから。（中略）

だがしかし、冷静な目で見れば、スターリング・アルビオンのチーム力は、二部リーグの上位チームとそれほど差はないレベルと考えられている。これは私だけでなく、英国サッカー界の実情をよく知る人たちなら、誰に聞いても同じだろう。理由は、シーズン終了と同時に、二部の上位と入れ代わらなければならない最下位二チームに相当の水はあけていても、リーグ全体から見れば、やはりいまのところは下位にいるからである。

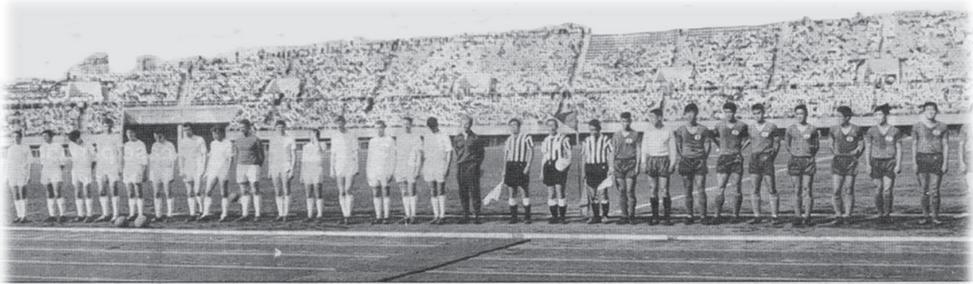
そうした事情を知っているせいか、実は私は本当のところ、来日が決定してからの日本の新聞・雑誌に出るアルビオンに関する記事については、いつも神経質になっていた。そしてアルビオンに対して少しほめすぎと思われる記事に出くわすと、複雑な気持ちを抱いたものだ。というのは、うっかりして日本のファンが、アルビオンに対して、英国のトップ・レベルと錯覚したら困る、と思ったからである。

要するに私が散見したところ、日本のマスコミ界においてアルビオンは、分に過ぎた前評判をうけていると思えるような節が多かったからだ。しかも、マスコミにしてみれば、何しろ日本に初めてプロ・サッカー・チームが、それも本場英国からやってくるのだから多少のオーバーな表現は歓迎のつもりだったかもしれないが…、しかしそれにしても、終戦後急速な進歩をとげつつある日本のサッカーの前に、もしアルビオンがひとたまりもなかったらどうなるだろう、とそれを私は心配したのである。

母国のチームが破れては恥ずかしいなどというけちな気持ちからではない。そのことで日本のファンが、日本のサッカーもヨーロッパのトップ・レベルに近づいたのではないか、とってしまったらたいへんだということなのである。ヨーロッパの実力はそんなものではない。　　（「サッカーマガジン」1966年8月号、78-79頁）

スターリング・A が残した記録とは別に、Stirling Journal and Advertise (Thursday, July 7, 1966) は、“STIRLING ALBION’S TOKYO TOUR WAS FANTASTIC Players Praise Japanese Hospitality and Football” の見出しとともに、日本ツアーからの帰国後、長編の総括記事を掲載している。（以下、記事を要約して記載する。）

「この遠征は素晴らしいものだった。この一言だよ。」とグラスゴー新空港でレス・トムソン主将は語った。（中略）「テヘランと東京で受けた接待はこの世のものではなかった。贈り物が降り注ぎ、それも決して安いものではなかった。様々な服やトラン



GREAT DAY: Stirling Albion line up against the Japanese national team at a stadium outside Tokyo.

ジスター、その他のものは、恋人や子どもたちに喜ばれそうだ。

野球が第一の日本でのサッカーの水準を問われて、レスは、「これから日本に行公と考えている倶楽部は、勝利するためには努力が必要だとすぐにわかるはずだ。簡単な試合ではなかった。」「日本は、とても熱心に学ぶ姿勢があり、セルティックやレンジャーズのような素早いチームと我々は戦ってきたが、彼らもすぐにそうなるだろう。」

また、マネジャーのサム・ベアードによれば、「テヘランでも東京でもすべてが特別のもてなしを受けた。我々の今回の訪問で最も重要なことは、新聞とテレビで素晴らしい報道がされたことで、次のシーズンのリーグでもカップ戦でもいい結果となるだろう」

A.D.ハミルトン団長は、歴史を作ったアルビオンを誇りに思うと同時に、極東こうした友好関係を気づいたことがさらに重要だ。テヘラン滞在中には、他の国からも招待を受けたし、今後の遠征も真剣に考えたい。」

同じ記事の中で、遠征に関わって日本についての印象も語られている。

レフトバックのJ.マクギネスが初めて東京でタクシーに乗った経験を横で聞いていたF.スミス団長は「彼らはジム・クラーク²⁹⁾のことを聞いたことがないんだ」

「合わせて4試合で10万人を超える観客の前でプレイをした選手たちは、東京の英国大使館でもてなしを受けた。」

「日本の観客を楽しませた。両試合とも軍楽隊が試合前とハーフタイムに音楽が演奏され、選手のためにレッドカーペットが用意され、王室のような扱いを受けた。」

29) (訳注) ジム・クラーク (Jim Clarke) はスコットランド生まれのF1レーサー、1968年事故死。

さらに、駐日英国大使は日本におけるレセプションにおいて次のように言明した。
「結果だけではなく、スポーツマンシップによっても、彼らの遠征は正当なものと呼
賛できる」

「日本でサッカー人気が増しているときに、あなた方が達成したことは、日本の選手
や国民に英国におけるゲームのより良い側面を示すことが出来ています」「あなた方
の訪問は、多くの日本国民の関心を引き付け、ピッチの内外の行いが、日英間の理解
の増進に供するだろうと思います。」「そして再び、スターリング・アルビオンに日本
で会えることを楽しみにしています。」

引用・参考文献

単行本・論文

- Bairner, A. (2000), 'Football', Jarvie, G. & J. Burnett, (eds.), *Sport, Scotland and the Scots*, Tuckwell Press.
- Bradley, J.M. (2004), *Celtic Minded*, Argyll.
- Gulianotti, R. (1999), *Football a sociology of the global game*, Polity.
- Laird, B. (2004), *Third Lanark Football Club*, Tempus.
- Martin, S. (2004), *Football and Fascism*, BERG.
- Mangan, J.A., (ed.) (2006), *A Sport-Loving Society Victorian and Edwardian Middle-Class England at Play*, Routledge.
- Morrow, S. (2003), *The Peoples Game? Football, Finance and Society*, Palgrave.
- Walvin, J. (1994), *The People's Game*, Mainstream.
- Wilson, R.(2012), *Inside the Divide One City Two Teams The Old Firm*, Canongate.
- 明石真和 (2006)「栄光のドイツサッカー物語」大修館書店。
- 朝日新聞百年史編修委員会 (1994)「朝日新聞社史・昭和戦後編」朝日新聞社。
- 遊津孟 (1975)「日本スポーツ創世記」恒文社。
- オリーヴ・チェックランド (2004) (加藤詔士・宮田学編訳)「日本の近代化とスコットランド」玉川大学出版部。
- 後藤健生 (2007)「日本サッカー史」双葉社。
- 後藤健生 (2013)「国立競技場の100年：明治神宮外苑から見る日本の近代スポーツ」ミルネヴァ書房。
- 毎日新聞百年史刊行委員会 (1972)「毎日新聞百年史1872→1972」毎日新聞社。
- 毎日新聞社編 (2002)『『毎日』の3世紀：新聞が見つめた激流130年上巻・下巻・別冊』毎日新聞社。
- トニー・メイソン (1991) (松村高夫・山内文明訳)「英国スポーツの文化」同文館。
- 日本サッカー協会・日本サッカーライターの協議会編 (2003)「最新サッカー百科大事典」大修館書店。
- 日本蹴球協会 (1974)「日本サッカーの歩み 日本蹴球協会創立満50年記念出版」講談社。
- 小笠原博毅 (2017)「セルティック・ファンダム」せりか書房。
- 佐藤彰宣 (2017)「スポーツ雑誌のメディア史」勉誠出版。
- 梅溪昇 (2007)「お雇い外国人——明治日本の脇役たち」講談社学術文庫。

牛木素吉郎 (2014)「取材歴59年の記者が見たW杯「裏表」ヒストリー」角川書店。
アンジェイ・ヴォール (1980) (唐木國彦・上野卓郎訳)「近代スポーツの社会史」ベースボール・マガジン社。

新聞・雑誌・定期刊行物

Forthbank News, (“Match- day Programme” by Stirling Albion)

Stirling Journal & Advertise

「サッカーマガジン」ベースボール・マガジン社

「アサヒグラフ」朝日新聞社

朝日新聞

毎日新聞

読売新聞

卒業論文

今井優 (2013)「日本における女子サッカーの発祥」2012年度関西大学社会学部マス・コミュニケーション学専攻卒業研究優秀論文集。

—2018.2.19受稿—